博士学位論文審査要旨

２０２４年１月１９日

論 文 題 目：日中交流における日本人の戦後意識
—1955 年前後の訪中知識人を中心に—

学位申請者：　池田　尚広

審 査 委 員：
主　査：　グローバル・スタディーズ研究科　教授　村田　雄二郎
副　査：　グローバル・スタディーズ研究科　教授　錢　鷗
副　査：　グローバル・スタディーズ研究科　教授　太田 修
副　査：　平安女学院大学　客員教授　加藤　千洋

要　　旨：

池田尚広氏の論文は、日中国交正常化前の時期に中国（中華人民共和国）を訪れた日本人による旅行記や手記を、その戦後意識のあり方にそくして検討するものである。提出された論文は序章、本論５章、終章からなり、本文は 115 ページ、巻末に附録「訪中者一覧（1952 年～1957 年）」と参考文献一覧を付す。

序章では、本論文で 1955 年を日中関係の重要な節目ととらえる理由を説明し、朝鮮戦争の勃発と休戦、中国共産党の対日政策の転換、日本政治における「1955 年体制」の成立などを背景に、1955 年から訪中する日本人が急増したことを指摘する。

第一章「1950 年代日本人訪中の全体像」は、1952 年～1957 年の訪中日本人の流れを、具体的数値をもとに整理する。訪中者数の経年変化、交流分野・訪問地の全般的傾向を分析するとともに、中国側の受け入れ体制についても論じる。

第二章「安倍能成の戦前と戦後」は、戦前に京城帝国大学で教えた経験をもつ安倍の 1954 年の中国訪問をとりあげる。安倍は左翼陣営の進歩的平和主義とは異なり、「個」の自由という観点から中国の政治体制に疑念を呈したが、中国側は安倍のそうした態度を許容することで、対日外交の促進をはかった、とする。

第三章「火野葦平『赤い国の旅人』」は、戦前「兵隊三部作」で名をあげた火野が 1955 年の訪中団に参加した際の旅行記を、その贖罪意識のあり方と関わらせて考察する。作中の人物造形には「新中国」を称賛するオポチュニストへの批判が読みとれ、自身が経験した大政翼賛会と中国の革命を重ね合わせてみるような記述もある。「戦犯作家」の汚名に苦しみながら、火野はこの作品を通じて体制迎合的な人々への懐疑を提示しつつ、一種の自己弁明をおこなったと、本論文は解釈する。

第四章「中島健蔵と日本中国文化交流協会」は、1956 年に発足した日本中国文化交流協会の初代理事長をつとめた中島健蔵における、文化交流と政治的立場の関係が考察される。中国と縁の薄かった中島が日中文化交流の活動に身を投じた背景には、反ファシズム体験を起点にした「共通の広場」の意識があり、それはまた、政治原則が優先される状況のなかで、中島をして「無党無派」の立場を貫かせた要因であったという。

第五章「有吉佐和子と中国」は、「戦争を知らない」世代に近い有吉が、中国の要人にも遠慮を

みせない奔放・闊達ぶりで中国側から特別の許可を引き出し、カトリック教会を取材したり農村に長期滞在したりすることができた稀有な事例を紹介する。しかし、若々しさを体現する日本の作家への中国側の譲歩には、やはり政治的ボトムラインがあって、交流はすれ違いに終わったと結論づける。

以上の考察にもとづき、終章では各章の内容を総括するとともに、今後の課題として、日本人訪中団を受け入れた中国側の視点から、当該時期の日中関係を再検討する必要が論じられる。

審査会では、1950、60年代の日本人訪中者の全体像を定量的データによって明らかにしたこと、また、戦前の経験や戦後の政治的文脈、日中関係の変化などを視野に収めつつ、戦後日本人の中国観の多様な展開を描き出したことが高く評価された。他方、本論で４名の訪中者を選択したことの意味づけ、個々のテキストの分析と解釈の妥当性について、質疑がなされた。また、中国側の対日政策の思惑や実態についてさらなる解明が待たれるとの指摘があった。これに対し、池田氏はおおむね的確で過不足のない回答を行い、本論文がのこした課題を十分に自覚していることも確認された。以上により、論文審査委員会は、池田尚広氏が提出した学位申請論文を、博士（現代アジア研究）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

総合試験結果の要旨

２０２４年１月１９日

論 文 題 目：日中交流における日本人の戦後意識
—1955 年前後の訪中知識人を中心に—
学位申請者：池田　尚広
審 査 委 員：
主　査：　グローバル・スタディーズ研究科　教授　村田　雄二郎
副　査：　グローバル・スタディーズ研究科　教授　錢　鷗
副　査：　グローバル・スタディーズ研究科　教授　太田　修
副　査：　平安女学院大学　客員教授　加藤　千洋

要　　旨：

池田尚広氏提出の学位申請論文にかかわる総合試験を、２０２４年１月１９日（金）の１０時３０分から１２時００分まで行った。池田尚広氏の専門分野である地域研究、とりわけ戦後日中関係史にかかわる専門知識について、審査委員が試験をし、十分な知識があることが確認された。また必要とされる語学（中国語）の能力についても、十分な能力があることが確認された。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨
Abstract of Doctoral Dissertation

論 文 題 目： 日中交流における日本人の戦後意識
Title of Doctoral Dissertation —1955 年前後の訪中知識人を中心に—

氏 名： 池田 尚広
Name

要 旨：
Abstract

本論文は 1955 年を戦後日中関係の一つの節目と捉え、前後の交流における日本人の戦争認識、戦後意識を中心に検討した。時代背景としては、1950 年代半ば、中国が成立当初の「武装闘争路線」を「平和外交路線」に切り替えたこと、また日本側では「55 年体制」の確立と対米自主路線における日中国交正常化へ期待がされた鳩山一郎政権の発足がある。1955 年 3 月には中共中央政治局で「対日政策に関する方針と計画」が可決され、同年 10 月には国会議員団(上林山栄吉団長)と全国人民代表大会常務委員会が北京で「共同コミュニケ」を発表し、同年 11 月には日本の憲法擁護国民連合が中国人民外交学会、中華全国総工会、中国人民対外文化協会との間で共同文書に調印した。また、訪中日本人が急増している点からも同年が日中関係および交流における重要な節目であることがみてとれる。

第一章では、当時の訪中者の全体的な傾向を明らかにした。高良とみ、帆足計、宮腰喜助が訪中し、第一次日中貿易協定が調印された 1952 年から長崎国旗事件をきっかけに交流中断が中国側から宣言される直前の 1957 年末までを対象とした。主に内閣官房内閣調査室が編纂したとされる『日本・中共交流年誌』復刻版（ゆまに書房、2015 年)、筆者が収集した日本人の訪中旅行記をもとに量的分析を行い、同時期の訪中者数推移、訪中者の分野、訪問都市の傾向を整理した。訪中者は 1955 年を境に急増し、1956 年以降は分野も多様化する。特に産業別労組交流と文化交流の拡大は 1955 年の憲法擁護国民連合と中華全国総工会、中国人民対外文化協会との間でそれぞれ調印された文書に基づくものであり、また第二次貿易協定、第三次貿易協定に基づき、日中双方で商品見本市が開催されると、個別の商談を目的とした訪中も増えていった。その後も中国側招請団体と日本側訪中代表団との間で頻繁に共同文書の調印が行われ、交流は拡大していった。第一章は、訪中者数の推移の観点からも 1955 年前後が日中関係の一つの節目である事実を裏付けると同時に、第二章から第四章で取り上げる人物と中国との関わりを論じる上での背景となるものである。

第二章から第四章は 1955 年前後に訪中した、あるいは日中関係に深く関わりはじめた安倍能成、火野葦平、中島健蔵の戦前、戦後の著作を対象に考察を行った。彼らはいずれも終戦直後の世論に広がった左翼進歩的な傾向に懐疑的な眼差しを向けた点で共通しており、「新中国」の「解放」の成果を率直に認めていた一方で、社会主義建設の裏側にある実情に疑いを捨て切らなかった。すなわち、従来の訪中旅行者に比べ、より客観的な視点で中国を観察しようとした人々である。同時に、日本の他国侵略の過去に対して負い目があることを明言していた点も共通した特徴の一つである。

第二章で取り上げるのは哲学者安倍能成である。安倍は戦前、朝鮮の京城帝国大学に赴任していた。日本の植民地主義を肯定する立場であったものの、一方で教育者として朝鮮人学生に向き合った一面もあった。その二面性からは、戦時下におけるファシズムの雰囲気に迎合しながらも大正教養主義の世代に特徴的な自然主義的な「自由」の抑圧との間で煩悶に苛まれていたことが

窺われる。一方、戦後には新憲法制定に関わり平和問題談話会の議長を務めるなど平和主義者として活動していた。また、安倍は反共的な言論でも知られる。終戦直後の日本の共産主義者の台頭にはかつての軍国主義者と同質のものを感じており、その厳しい観察はソ連や「新中国」に対しても同様であった。安倍の訪中は 1954 年 10 月の国慶節招待という、日本人訪中者急増の入口にあたり、中国側の「平和外交路線」がいよいよ本格的に日本に対して展開されようという時期である。中国側が安倍を招請した事実は、それまで左翼進歩主義的な平和思想の持ち主に偏り無条件な礼賛ばかりであった時代とは一線を画す、左派だけではなく右派も広く包摂しようという態度の一端であった。

第三章で取り上げるのは作家火野葦平と彼の戦後代表作の一つである「赤い国の旅人」である。火野は、戦前に中国を舞台とした「戦争もの」作品で文壇での地位を確立し、ゆえに戦後は公職追放となった。1955 年に中国を再訪した火野は、かつて一兵卒として中国の地を踏んだ自身の「保守反動」的な経歴によって、引け目と畏れから、過去と現在をめぐる自己内対話を余儀なくされた。「赤い国の旅人」はそうした火野の戦後の心性が「新中国」への印象とともに記されている。同作は、火野の戦前の経歴ゆえに容易に彼の「贖罪意識」と結び付けられがちであった。一方で、戦後の火野は内面に戦後オポチュニズムに対する批判意識があったことも指摘されている。第三章では、作中では偽名で記されている登場人物の特定を行い、そのうちの主要人物「常久」が火野の創作による架空人物である可能性を見出した。その結果、同作は訪中ルポルタージュであると同時に、より色濃く反映されているのは遺作『革命前後』を含む火野の戦後作品に通底するオポチュニズム批判であることを論じた。火野の批判意識は、彼を戦後一方的に「戦犯」たらしめた左翼思想に対するものである。また、作中で火野は「新中国」の「解放」の成果を確かに認めているものの、長江の大鉄橋建設には日本の「大政翼賛会」を重ね合わせ、窮屈そうに映る社会主義体制にも否定的であった。以上のような観点から、第三章では同作を「贖罪意識」が付き纏う戦前の経歴の側からではなく、戦後の火野の心性に視座を置き換えて読み直す。

第四章で取り上げるのはフランス文学者中島健蔵である。中島は戦前から中国と直接的な関わりがなかったにも関わらず、1956 年 3 月 23 日創立の日本中国文化交流協会の理事長に就任した。その理由はしばしば戦中の体験に集約して伝えられる。それは 1942 年に軍部の「宣伝班員」として派遣されたマレー半島で、日本軍による華僑虐殺があった事実に触れたというものである。その動機は戦後日中関係に関わる上で重要である一方、第三章の火野同様、安易に当時の日本人が持って然るべきとされた「贖罪意識」に結び付けられた感も否めない。したがって、第四章では中島の一連の回想を洗い直し、戦前から戦後に至り貫かれた「共通の広場」の理想の上に中島と日中関係との関わりを位置付け直す。日本中国文化交流協会の創立は、前述の憲法擁護国民連合と中国人民対外文化協会との間で調印された共同文書に基づくものであり、いわばより広範な交流展開を日中双方の合意のもとで目指した結果である。中島の「共通の広場」は、反ファシズムへの反対は当然ながら、終戦直後の急進的左翼による排他的民族主義を批判的に受け止めた結果であった。その後、朝鮮戦争勃発を背景とする日本の再軍備反対など実践的な政治運動の色彩を帯びる。日本中国文化交流協会もまた社会党系の憲法擁護国民連合を母体とする以上は党派性の排除は難しかった一方で、幅広い文化界人士を包摂するという目的において両者間の折り合いが必要であった。そこにきて中島への理事長就任の打診は時代の要請であったともいえ、1955 年から 1956 年の日中関係と中島および中島の「共通の広場」との関係性を考察する。

第五章では作家有吉佐和子を取り上げる。1961 年に初めて訪中した有吉は、当時まだ 31 歳であった。同じ作家代表団に参加した亀井勝一郎、井上靖、平野謙（いずれも 1907 年生まれ）より二回りも若年である。終戦時まだ 14 歳だった有吉は、戦中の皇国史観はおろか終戦直後に流行した左翼進歩思想をほかの訪中作家ほどは共有しておらず、日本の他国侵略についても当事者意識は相対的に希薄であった。しかし、有吉はその世代的な相違と彼女自身の純粋無垢で闊達な性格から積極的に中国側と関わり、周恩来、郭沫若、周揚、老舎、謝冰心といった要人、文化人と広く交流を持つようになった。1965 年には中国カトリック教会調査を願い出、半年間の長期滞在を実現し、中国側から調査の便宜を受けている。中国側の提供した情報は限定的ではあっ

たものの、中国の社会体制の機微に切り込んだ有吉の姿勢は、1950 年代の訪中者が踏み込むことのなかった中国側の意図を解明するきっかけとなった。第五章では、1971 年に岩波書店『世界』に発表された「中国天主教――一九六五年の調査より」を対象に、訪中時に有吉が残した直筆ノートや持ち帰った資料（和歌山市立博物館所蔵）と照合し、訪中時の有吉と招待側である中国との関係性を考察する。

巻末は 1952 年から 1957 年の訪中者一覧である。第一章と同様『日本・中共交流年誌』の年表に記載ある訪中者と筆者の収集した訪中旅行記を参照して作成した。